

「諸外国における獣医師養成制度に関する調査研究」の概要

北海道大学大学院獣医学研究科

伊藤 茂男、橋本 善春

ここに示した図は、報告書の巻末にある各大学の調査結果の数値をまとめたものである。これらの調査結果は調査票の送付、訪問調査、ホームページさらには自己点検評価書 (Self Evaluation Report) などに基づくデータを整理したものである。可能な限りデータの質を合わせるために得られた数値を取捨選択したが、部分的に質が異なるデータも含まれている。例えば教員数の場合、専任教員だけではなく非常勤講師などに係数をかけたもの、あるいは Teaching Assistant を含めている可能性、またサポーターティングスタッフでは清掃などの職員も含まれている可能性は否定できない。獣医大学の規模が大きいため、聞き取り調査や資料作成に協力してくれた教員が大学の全ての情報を把握していない場合も多かった。しかしながら、世界の獣医大学の状況を短期間に調査した資料はほとんどなく、現時点でのアジア、米国、欧州の獣医大学の概略を十分把握でき、日本の獣医学教育の今後の改善に大いに役立つものと確信している。訪問調査した大学の先生から伺ったことをレポートなどにまとめており、是非とも参考にさせていただきたい。

北海道大学と比較できるように北大のデータも合わせてまとめた。エアラング大学はインドネシア、コウケン大学からマヒドール大学まではタイの大学である。マッセイ大学はニュージーランド唯一の獣医大学である。欧米の獣医大学の現状を北大のそれと比較して簡単に考察すると以下のようなになる。

- 1) 欧米の獣医大学の教員数にはかなりばらつきがあることがわかる。欧米の獣医大学の平均的な教員数をとると 150 名程度になる。北大は 50 名であり、北大よりも 3 倍多い教員で教育を行っていることになる。
- 2) 欧米の大学の学部学生数にもかなりばらつきがあるが、強引に平均値をとれば 600 名程度になる。欧米では 1 学年 100 名から 150 名の学生数が一般的で、これも北大の 3 倍ぐらいの学生数である。教員対学生比を比較すると北大、他の国立大学法人と欧米の大学ではほぼ同じである。
- 3) 我が国の国立大学法人の獣医大学の大きな問題点は、それぞれの大学の規模が小さすぎるため、社会的なニーズに合わせた臨床獣医学の細分化、獣医公衆衛生の細分化、学際領域の教育などが難しい点にある。特に臨床分野に関しては、この問題は深刻で、欧米の臨床教育の質と大きな開きが生じている。
- 4) 大学院の学生数は、欧米の大学では 150 名程度で、北大は 90 名 (留学生 30 名) である。欧米獣医大学に比べて、北大の学生は研究者志向が高く、大学院生数は多い。

- 5) 一方、サポーターティングスタッフ数は欧米の大学と比較すると極端に少ない。北大は調べた大学の中で最低で、タイの大学に比べても少ない。サポーターティングスタッフの不足は、獣医大学のみではなく日本の高等教育全体に言えることである。教員が事務職員や技術職員の不足を補っており、近年教員の教育研究業務を圧迫し、教育研究診療以外の雑用が非常に増加している。
- 6) 動物病院の教員数と技術事務職員数に関しても、北大と欧米の大学では大きな開きがある。動物病院における教員数は、欧米では 30-40 名であり、北大と比較すると 3 倍以上の違いがある。動物病院に勤務する職員の数にも大きな差がある。産業動物の診療をしている大学は一般的に男性技術職員が多い。大動物を取り扱う大学病院では、動物を管理するために多くの技術職員が必要となるためである。付属農場を所有している大学では、そこで働く技術職員の数が上乗せされていると思われる。
- 7) 米国の大学ではレジデントやインターン制度が発達しており、教員数にほぼ匹敵する数の獣医師（レジデントなど）を加えて大学動物病院の診療を行っている。
- 8) 多数の入院患者がいると報告した大学があるが、その詳細は不明である。延べ頭数と実頭数で表記されたデータが混在している可能性がある。入院患者数は北大では非常に少ないが、外国の入院患者数はかなり多い。外来患者数は大学毎に大きく異なるが、平均すると欧米の大学では北大の倍ぐらいである。外来患者数はおそらく延べ頭数と思われるが、入院・外来患者データを考慮して判断すべきかもしれない。AVMA や EAEVE の獣医大学の認証評価においては、24 時間診療体制や緊急医療体制の構築が求められており、このような診療体制をとれば入院患者数は必然的に増える。さらにこの体制を支えるサポーターティングスタッフも必須となる。
- 9) 大学動物病院の診療科を比較すると、欧米の大学動物病院では専門医制度が発達し、いくつかの診療科を立てて診療を行っていることが分かる。アジアの大学ではこのような専門医制度自体が始まったばかりであり、診療科の細分化は今後の大きな課題である。欧米の獣医大学動物病院では一般的な高額医療機器や動物病院施設も、日本やアジアの獣医大学では保有していない大学が多い。

獣医大学の共同獣医学部や共同獣医学課程は、欧米と比較して規模が小さな獣医大学の教育の質を保証するため教育改革の第一歩として捉えることができる。さらに共同教育を進める中で、この共同獣医学教育を国際的に通用する教育に如何に転換していくのかが、日本の獣医大学の教員に課せられて次の大きな課題であり、また使命でもある。報告書の中には米国や欧州の AVMA や EAEVE における獣医大学の評価認証システムに関する調査結果も合わせ掲載した。このような調査を委託された文部科学省高等教育局専門教育課に心から感謝申し上げるとともに、平成 22・23 年度先導的の大学改革推進委託事業「諸外国における獣医師養成制度に関する調査研究」実施報告書をご活用いただければ幸いです。